

美作中山神社とオオナムチ・物部氏

—中山神社社伝を中心として—

志野 敏夫

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2005年9月30日受付、2005年11月7日受理)

はじめに

近年、いわゆる記紀神話を、かつてのように朝廷による創作であるとするのではなく、何らかの史実を反映しているものとする研究が多くなってきている。筆者も、岡山市吉備津にある吉備津神社に伝わる伝承を中心に、古代吉備の姿を描く試みを行った。また、ある神社の研究は、その神社を巡る人々の歴史を垣間見ることができ、記紀など、「中央」の歴史からはこぼれてしまった、地域の歴史を考察するには、重要な要素となっている。

しかし、この神社の伝承や祭神は、そのほとんどに混乱が見られる。一定していないのである。祭神などは、神社そのものが集合・分祀を繰り返しているため、ついにはどれがもともとの主祭神であったかすら分からなくなっている場合が少なくない。村社以下の「小さな」神社では顕著であるが、一宮とされるほどの「大きな」神社にあっても同様である。だが、むしろこうした「混乱」こそ、そこにまつわる歴史を紐解く鍵となるのである。

岡山にあっては、その典型とも言えるのが、津山市にある美作一宮とされる中山神社であろう。この神社の祭神は、大正頃には金山彦と言っていたようであるが、今は鏡作命とされている。そしてこうした混乱を元に、多くの史家が美作・吉備の、あるいは古代日本の歴史を再現しようと試みられている。幸い、こうした創建も古く、大きな神社には多くの社伝があり、貴重な材料を提供してくれている。

今回は、この中山神社に伝わる社伝・物語を材料に、古代美作・吉備の歴史の一端を考察してみたいと思う。私論・試論の域を出ないが、大方の御叱声を賜るならば幸いである。

1. 中山神社の諸々の主祭神

現在は中山神社としては、主祭神に鏡作命、相殿神に石凝姥命と天糠戸命を御祭神としている(1)。しかし、中山神社の主祭神は具体的に何という神であるのかは、実はよく分かっていない。

中山神社自身がまとめた、大正12年初版発行の『中山神社資料』は「本社ノ祭神ハ金山彦命ニ座スサレド」古来諸説あり、「社伝ニヨルニ鏡作命ヲ主神トシ大己貴命、邇々杵命ヲ配祀スト云フ」とし、さらに『中山神社祭神考』の文章を載せ、その『中山神社祭神考』は、『中山神社記』に鏡作命を主神とする説を正伝であるとし、その他は異伝であるとして、以下のようにまとめている(2)。

其正伝異説祭神ノ御神号ヲ列記スレバ左如

但シ御相殿両神ハ延喜式後別社ヨリ合祭シタルニ付コヽニ掲ケズ

正伝トスベキ社記ニ曰ク

一鏡作命 石凝姥命ノ御神業ノ御上ヨリ本社特ニ鏡作命ト尊称シ奉ル所ナリ別記祭神考ニ明ナリ

異 伝

一吉備武彦命 作陽誌著者江村氏ガ元禄中始メテ唱ヘタル異説ナリ
大日本史古事類苑等ニハコレヨリ引キタルナリ

全

一石凝姥命

天糠戸命 是ハ江村氏ガ社記ニ因リタル一説トシテ唱ヘタル処ナリ

- 全
 一大巳貴命 元龜年間延喜式頭注ヲ始メ同考証併ニ一宮記其他以後ノ書多ク此ノ書ノ異伝ヲ挙グ
 全
 一石凝姥命
 一天鏡命 京都ノ儒家松岡如庵ノ説 江村氏モ亦後年ニ至リ賛シタル所
 一天糠戸命
 全
 一金山彦命 平田家ノ説ナリ

ここでは、鏡作命と石凝姥命を同じとしているが、この他『中山神社資料』所載の『社伝取調書』や『有木家所蔵文書』なども同様の見解をしている(3)。石凝姥命や天糠戸命は有名な天岩戸神話で鏡を作った神として『古事記』や『日本書紀』の一書に登場する神々である。谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』は、『三大実録』や『日本霊異記』などを引いて「考え合わせると、鏡作命は単に銅鏡生産の守護神にとどまらず、銅・鉄の採鋳冶金に従事する部族の守護神であったといえる。」としている。

『作陽誌』は主祭神を、吉備一宮、つまり吉備津神社から勧請した吉備武彦命、相殿に吉備津彦命・吉備津姫命をまつり、合わせて三座としている。吉備津神社もまた、製鉄と深いかわりがあると考えられる神社である(4)。ただ、この説が何を根拠にしたかはよく分らない。『作陽誌』は津山藩の儒者江村宗晋により元禄年間に著されたものであるが、『中山神社祭神考』が引く、元禄十六(1703)年の奥書がある『社記略記』に「瓊々杵尊 鏡作尊 大巳貴尊」としており(5、あるいは、享保 9(1724)年に神道管領のト部兼敬により書き写された神社に古くから伝わる『中山神社文書』には、「左天津彦彦火瓊々杵尊 中鏡作尊 天御中主尊 右大巳貴尊」としている(6 からである。その後、安永 3(1774)年に津山藩の調査に対して「瓊々杵尊 鏡作尊 大巳貴尊」の 3 神を答えている(7 から、当時は神社としては吉備津彦命は祭神とは考えていなかったのである。

また、『作陽誌』では三座を鏡作命・大糖戸命・石凝姥命として主祭神を鏡作命と考える「一説」をあげていて、さらに、『一宮記』が大巳貴命としていることを紹介しつつ、大巳貴命は地主神で(境内にある)国主社がそれであるから、この説は間違っていると言う(8)。とはいえ、上掲の『中山神社祭神考』にあるように、大巳貴命を祭神とする書は多い。大巳貴命は出雲で国造りをし、後に大国主命の名をスサノオ命からもらい、さらには大物主命ともされた神で、出雲が製鉄の国として有名であることから、やはり製鉄にも関連していると考えられる神でもある(9)。

『中山神社祭神考』が最後に挙げる金山彦命はいうまでもなく、製鉄業者の神である。平田家とは平田篤胤家のこと。神社自身の編纂する『中山神社資料』で「本社ノ祭神ハ金山彦命ニ座ス」と言っているのであるから、これが編纂された大正 12 年ごろは、神社としては主祭神を金山彦命としていたわけで、先に見たように元禄～安永ごろや現在は鏡作命に変わっているというように、中山神社の主祭神は定まっていなかったであろう。

しかしいずれにせよ、中山神社自身は、金山彦命にしろ鏡作命にしろ、製鉄にかかわる神社であるとの自覚を持っているようである。中山神社は製鉄に深い関係のある神社であるということは、諸先学が指摘するように(10、周辺の製鉄関連の考古遺物・遺跡、「金山谷」「金山口」といった地名などからもそれは言えるであろう。真鍋成史氏によれば津山市周辺では合計 17 遺跡で古墳時代に属する製鉄滓が確認されると言う。

2. 中山神社とオオナムチ神

ところで、このように諸神が坐して定かでない状態は、神々の歴史的な変遷が反映しているとする考え方があ

『中山神社縁由』では、「美作国の惣鎮守中山大神宮は、鏡作のみことにてなんおはします。これは天照太神の天岩戸にこもらせ給ふとき、御姿の鏡をつくらせ給ふ御神なり。人皇四十二代文武天皇の慶雲三丙午年此国に始て天くたり給ふ」「此地はもと大巳貴命の住せ給ふ所なり、いつの比よりおはしますとするものなし、神世に鎮座し給ふにや、又相殿に瓊々杵尊もしつまりおはします、これは人皇第四代懿徳天皇の御時天くたり給ふ、その時天皇も行幸し給ひけるとなん、はしめ御神此所にあらはれ給ふ時、地主、大穴持の命に宮柱ふとしき立て住せ給はんとこひもとめ給ふ、即ゆつりおはしまして、大穴持の神は祝木のもとにうつり住せ給ふ」としている(11)。『社伝取調書』は「社記ニ大巳貴命ハ神代ノ鎮座トシ、瓊々杵尊ハ懿徳天皇四ノ鎮斎

トシ、鏡作命ハ慶雲四年神勅ヲ奉シテ祀ル所トス」としている(12)。

また、『中山神社縁由』は、先の鏡作命が「始て天くたり給ふ」たときのこととして、上文に続けて次のような話を伝えている。

白き御馬にのり青木の枝の鞭をもて行めぐり給ひ、しつまりおはしまさん所をもとめさせ給ふ、先五月のはしめに、英多郡檜原といふ所にはれさせ給ふ、此里に東内といふ民なんありける、もとより心のすなほなる事なへてならぬものにてそありける、それかもとに廿日あまりかりにしつまりおはします(13)

こののち又苦東郡水無瀬川の奥に、泉水池といへるちいさき池のあるに、そこにあらはれさせ給ふ、そのあたりにちこのよさかといふ所もあり、これは御神ちこの姿にあらはれさせ給ひて、あけまきとものおほくあつまりゐたるに、立ましりてあそひ給ふ(14)

同年九月廿一日になん、又同郡田邊といふ所にはれさせ給ひて霧山にいらせ給ふ、此所にかりするおのこ有木といふものなんありける、御神を見奉りてかゝる深山にかくやんことなき人やはあるへき、変化の物なるへしとうたかう、御神告ての給はく、われは此国を鎮護し給はんとおほしめす神なり、…よりて有木か子孫うけつきて此わさ世々にたゆる事なし(15)

同慶雲四丁未年四月三日寅の刻はかりになん、鵜羽河のうへなる中山の長良嵩にあらはれさせ給ふ、鵜羽河は水上霧山よりなかれ出て、御社の東の瑞籬のもとを過る河なり、御神霧山におはします時、此河に鵜の羽をひとつ流させ給ひて、此はねのなかれとまらん所にひかりをはなちて鎮座し給はんと、有木に神勅をさせたまうふ、鵜羽長良嵩のふもとなかれいたりてとゞまりぬ、よりて此河を鵜羽河といふ、此里に住める男中島頼名といふなん侍りし、それに宮瀬河の辺に宮柱ふとしき立ていつき祭るへきよしなん神勅し給ふ、…翌年戊申二月六日御社正しく造り出てうつし奉る、それより永く此所に鎮座し給ふ(16)

これらのことをうけて、『津山市史』は、祭神に諸説あるのは「古代において中山の神を奉ずる集団がいくつかあったということであり、それらの集団の勢力の交代によって主神の性格もまたかわっていったのであろう。」と推測し、上述の東内や有木たちのところへつぎつぎと移っていく中山神の伝承にこのことが語られている、としている(17)。まずは妥当な考え方ではないだろうか。

しかし、そうであるとするならば、ここに一つ大きな問題がある。それは、諸神の中に大己貴オオナムヂ命があることである。

先の考え方を認めるならば、古代において、津山にオオナムヂを奉ずる集団があったということになる。あるいは、神話・神社から古代史を考察する研究者の立場は、ある神・神社がその本質を離れて別なある地にあるということは、その神をもともと奉じている集団の支配下に、その地域があったということを示すと考える。オオナムヂ神は、言うまでもなく、出雲の国神である。したがって、津山はかつて出雲の支配下にあった、ということになるであろう。たしかに、岡山県の神社には大己貴命を祭る神社がいくつもあり、中山神社にもオオナムヂが祭られることにさほど違和感はない。しかしだからといって、古代の吉備や美作が出雲の支配下にあったとしてもよいであろうか。少なくとも、記紀の記述の中から、神代の時代も人皇の時代も含めて、そう読み取れるような部分はないように思う。

では、製鉄の神として、古代の製鉄者集団に奉じられていた、という見方についてはどうであろう。真弓常忠氏は、オオナムヂの表記の一つである「大穴持」の穴を「鉄穴」と解し、大己貴神を鉄の神と考えておられる(18)。しかしそれに対し、古賀登氏は、神話の中で鉄穴であることを示す話は何もなく、オオナムヂが洞穴の中に坐したのも『古事記』によれば出雲国譲りの後であり、最初から穴の中にいる神であったわけではないから、この神が火山や鉄穴に祀られているのは後代のことである、とされる(19)。従うべきであろう。

津山を流れる吉井川を少し下ったところで合流する吉野川の上流、鳥取県智頭町と接する西栗倉村にある入江神社・金毘羅宮・猪之部神社・影石神社・大社神社・威徳天満宮・栗倉神社の祭神は、威徳天満宮を除いてみな大己貴命・大国主命あるいは大物主命である。これらについて、この八社の祭りを執り行っておられた元宮司の萩原隆広氏のお話によれば、江戸寛政年間に、まず栗倉神社を、そして入江神社、影石神社を中山神社から勧請し、高神^{タカカミ}と呼んで格式を上におき、その後残り 4 社を分祀して現在に至っているということである。また最初に勧請された 3 社に、猪之部神社、東栗倉村の内ノ山神社・青野神社・吉田神社、兵庫県佐用郡佐用町の奥海神社と合わせて「栗倉八社」と言われ、栗倉神社がこれらの本社と位置づけられている、という(20)。このことは、ある時期美作地方では、中山神社と言えば大己貴の神という考えが一般的

であったことを示す一方、オオナムヂを奉じるからと言って、そこが出雲の支配下にあったとは言えない場合があるということもあらわしている。それはいつごろ祭られたか、にかかっているということである。粟倉では、出雲という地域と密接にかかわってオオナムヂが人々にとって“生きていた”古い時代よりずっと後代になって、大日貴命・大国主命・大物主命が多くの人々にあるイメージを持って受け入れられ一般化した時代に、この神がいくつも持つさまざまな属性の何事かに注目して、自分たちの神として勧請してきたのである。いろいろなところに見られる、そして中山神社内にもある国主社あるいは国司社に大国主命が祭られるのも、(大)国主＝地主神として奉られるのであり、そうしたことの端的な例であろう。『津山市史』は、東内や有木の話から、「中山の神の本来の姿は山の神であり、それはまた水の神であり田の神である。」という(21)。オオナムヂ神の大国主命＝地主神としての属性は、そうしたところから注目され祀られたのではなかっただろうか。

一方、中山神社が製鉄に関係していることもまちがいないであろう。そうしたことから、オオナムヂ神が鉄にかかわる神であると言われるようになったある時期以降に、ここの神であると言われるようになったのではないだろうか。地主神とは違った属性の神として、つまり別の神として祀られたのである。中山神社内に祭られる国司社の大国主命とは違った神としてのオオナムヂ命が祀られたというこのことは、後述するオオナムヂの別名とされる大物主命を考える上でも重要なポイントとなる。

とはいえ、『中山神社由縁』や『社伝取調書』は神代からもとオオナムヂ神が坐したとしており、それは少なくとも、何らかの記録によっているであろう鏡作命が祀られるようになったという文武天皇慶雲4(707)年よりは、古い時代であったと考えることはできるように思えるのである。古賀氏はオオナムヂ神が鉄の神とされた「後代」がいつのころであるかを明らかにされていないが、私も今直ちにそれを断じることができるだけ材料を持ち合わせていない。しかし、慶雲4年に「鏡作命」という製鉄にもつながるような神が勧請されたというのも、それ以前から中山神社には製鉄関連の神が坐したからではなかっただろうか。そして、その神がオオナムヂであるとされるに至る、契機となったのではないかと思える一つの材料となるであろう伝承が、中山神社にはあるのである。

3. 美作・吉備と物部氏

その、中山神社に伝わるものがたりは、『中山神社縁由』附録によれば、以下のとおりである(22)。

むかし此さとに伽多野部長者乙丸となんいへるとみ人ありけり、地主大穴持の神をことにたふとみおもひけるに、御神に宮所をゆつりまして後は、こと所にしつまりおはしますといへとも、神威のいたくおとろへさせ給ふ事をほいなく思ひ、御神のことにさかへおはします事をそねみ奉りける心もや侍りけん、贅賄猪狼の神いかりましていたくとかめ給ふにより、けいし親族ともことごとく身まかりなんとす、乙丸おとろきおもひ身のあやまりをくひて申さく、永く此ところを立しりそき、人贅にかへて鹿二頭つゝことにそなへ奉るへしとかたくちかことをなし奉り、足を空にしてのかれゆく、御神これをあはれみおほしめして、先しはらくとゝまりて牛馬の市をなすへきよしの神勅ありければ、乙丸よろこひにたへすあなうれしやといひて、立かへりつゝ家のまへなる川原にしてあまたのうし、むま又家につみたくはへたるくさくさの物なんと、みなうりはてゝ、後に弓削庄にうつりすむ、もとよりうしむまをめてさせ給ふ神のなへてならぬ御神なるかゆへに、此市ことに神慮にかなひけるによりて、年ごとにさかりに行れて世々にたゆる事なしといふ、その乙丸か家のあとをは長者御前とてあり、そののち正月八日毎に鹿二頭つゝそなへて贅賄猪狼を祭る事久し、その鹿贅をそなへて祭りし所をは贅殿となんいへり、御神鹿大蒜を喰事をいたくいましめ給ふといへとも、正月八日より四月八日にいたるまで鹿の相火をゆるさせ給ふといふ、これそのことのもとなりそと、一とせ鹿贅の祭おこたる事の侍りしかは、贅賄猪狼の神いたくたり給ふ、此とかめによりて、贅賄猪狼を弓削庄に遷座なし奉りて志呂大明神とあかめ祭る、庖谷といふ所にて贅祭をつかうまつりけるに、御神の末社に上宮といふおはします、志呂明神のまねきにより庖谷につとはせ給ひて贅祭をきこしめしきとなん、此ところをすなはち庖谷大明神とあかめけるとそ、後には正月十五日に頼信名といふ所へ民ともあつまりはかりて十六日になん大菅山といふ所にて鹿を狩しとかや、贅賄猪狼を弓削庄にうつし奉りてのちは鹿を贅殿にそなふる事なしといふ

読みづらいので要点をまとめると、「大日貴命が中山神(おそらく鏡作命)に宮所を譲ったところ、以前から大日貴命を奉じていた伽多野部長者乙丸がそれを不満に思った。これを怒った贅賄猪狼神が乙丸に祟ったので、乙丸は毎年鹿2頭づつを供えることにした。贅賄猪狼神はこれを許し牛馬市を開かせた。その後、乙丸

は弓削庄に退いた。鹿は大昔山で取り、庖谷で贄祭りをした。あるときこの鹿贄の祭りを怠ったので、また贄賄猪狼神が祟った。そこで贄賄猪狼神を弓削庄の志呂神社に勧請した。その後、鹿を中山神社に供えることはなくなった。」ということである。

これに関して『津山市史』は、中山神が霧山に下ったときのことを有木家では「変化のものならんとて弓引まりおひたちむかひしに、忽に御銚のかたちにならせたまひて、弓のうらはつにとまりたまふ」と伝えていることなどから、有木氏は贄賄猪狼神と呼ばれる軍事集団を率いて中山神に服し、『中山神社縁由』の伽多野部長者乙丸伝承は、これを先兵とした大和朝廷の支配に服属した後の吉備武彦（吉備津彦）を祭る南部吉備地方の勢力が北進してきた状況を物語るものだろうと考えている(23。岡山県＝吉備・美作の歴史を考える上で、そのような南部吉備勢力の北進ということがあったかもしれないという点で、この説は傾聴に値する。しかし、この中山神社の伝承に即して考えた場合には、そのようには言えないように思えるのである。『津山市史』は、鏡作部の祖神である天糠戸神・石凝姥神や鏡作部の伝承が神社にはまったくない。霧山の西山麓地帯に香々美の地名が残っているから中山神が鏡作の祖神であっても不思議ではないが、「その伝承は中山の称号とともに吉備武彦を斎き祭る勢力が進出してきた過程で消滅したと思われ、わずかに祭神の名称のなかにその名残を止めたとおもわれる。」とし、「中山の称号とともに吉備武彦を斎き祭る勢力」を「大和朝廷の支配に服属したあとの吉備地方の勢力」と考えるのであるが、石凝姥命や天糠戸命は天神アマツミであり、したがって鏡作部はそもそもが大和朝廷の勢力側である。これを美作土着の神・勢力とするよりは、むしろ、大和朝廷の勢力がこの地に進出してきて君臨することとなったときに、すでに祀られていた製鉄の神にかかわって中央でそれに相当する神として鏡作命が連れてこられたと考えるほうが妥当なのではないだろうか。だからこそそれ以前からの伝承もないのではないだろうか。『中山神社縁由』や『社伝取調書』が文武天皇慶雲4(707)年から鏡作命を祀るようになったと、具体的な年号を挙げて言うのには、それなりの根拠があったと思うのである。南部吉備勢力の北進があったとしても、それは8世紀のはじめという律令体制が整えられる時期よりはずっと以前のことであったろうから、南部吉備勢力によって鏡作命の伝承が消されたというようなことは起こりえなかったのではないだろうか。

とはいえ、神事に使う犠牲を毎年差し出させるというこの話は、何らかの史実を反映しているように思えるのである。

であるとするならばまず問題となるのが、伽多野部長者乙丸とは何者であるかということである。

「伽多野部」は「カタノベ」と読むが、そうすると、大阪府に交野カノ市というところがあり、ここを本拠とする物部肩野連モノハカノムラジという名が『新撰姓氏録』左京神別にみえ、『先代旧辞本紀』天神本紀には、饒速日尊に従って交野市私市に比定される河内国嵯峨に天磐船に乗って天下った天物部二十五部の一人に肩野物部があげられている。『新訂訳文 作陽誌』(24)や『久米郡誌』(25)には伽多野部長者乙丸を「肩野物部」「物部肩野」としている。つまり伽多野部長者乙丸は、物部氏であった。

そして、『久米郡誌』が、昔物部肩野が宅を構えていて今も礎石が残ると言う久米町の稼(稼)スモ山やその近辺からは、多くの製鉄関連の遺跡・遺物が認められている(26。真鍋成史氏は、交野市からも4遺跡で鍛冶関連遺物が出土、津山市周辺と同じく鉄鉱石を始発原料とする鍛冶操業が認められ、津山・交野両地域において、肩野物部と鉄・鉄器生産とが結びついている可能性を指摘されている(27。真弓常忠氏は、一步踏み込んで、「美作国において、製鉄集団を部民として支配したのは物部氏であった。」とされて、この伝承は、「これは律令制の施行によって鉄砂の採掘権が収公されたことを意味している。」と推定された(28。中山神社の神々が製鉄に関連しているようであることからしても、この説は説得力がある。しかし、そうすると問題は、真弓氏自身も指摘されるように、祖神をニギハヤヒノミコト（あるいはウマシマジノミコト）とする物部氏がオオナムヂ神を祀っていたとされていることである。真弓氏は、物部氏の活躍が主として軍事的なものととして歴史に現れるのは、物部氏が全国的に製鉄の部民を支配していた事実に基づくもので、一方、オオナムヂ＝大穴持は原初は製鉄の神であるから、物部氏がこれを祭ったのだ、と考えておられる。オオナムヂ神の原初的属性に製鉄の神はなかったと考えるべきであるということは先に述べたとおりであるが、それにしても、8世紀はじめ＝記紀の成立時期ごろにオオナムヂがその属性を獲得していたと考えることはできるであろうから、製鉄に深く関わっているようである物部肩野がそのオオナムヂ神を奉じていたということは考えうる。しかし、『中山神社縁由』では、大己貴命→瓊々杵尊→鏡作命としていて、この乙丸の話は「附録」に載せている。つまり、『中山神社縁由』の中では、オオナムヂが譲った「御神」とはニギノミコトであったということで、8世紀初頭に鏡作命にかかわったときより以前である。また、犠牲の鹿を神社に納めるという行為

は、律令体制の整備とともに部民が収公される様を現しているようには考えにくい。岡田精司氏は、『日本書紀』第十一の仁徳 38 年 7 月条に「苞苴材^ニ」として鹿が献上されていることなどから、大王の祭祀に鹿が重要な役割を果たしていたことを明らかにされている(29)。伽多野部長者乙丸が贅賄猪狼神に服属したというこの話は、もっと古い時代のことで、あるいは律令制施行による収公といった「公的」「全国的」な出来事ではない「私的」「地域的」なことを語っていると見るべきではないだろうか。

結論を言えば、これは、587 年物部守屋が蘇我馬子らに滅ぼされたことに関連して、美作で起こった出来事だったのではないかと考える。

そもそも、物部氏がこの地にいつごろ来たのかということが問題である。記紀には、物部が吉備に来たというような事柄は見えない。島根県大田市川合町に物部神社があり、この社伝を『日本の神々 神社と聖地』7 が要約・紹介するが(30、ウマシマジ命とアマノカグヤマ命が物部の兵を率いて尾張・美濃・越国を平定、ウマシマジ命はさらに播磨・丹波を経て石見国に入り、川合を平定した後、ここに鎮座したという。播磨・丹波からいきなり石見に入っているというから、日本海側からにせよ瀬戸内海側からにせよ、おそらく海路を使って行ったであろう。いずれにせよ、美作から石見に行くというのは困難であろう。

しかしここに、注目される記事がある。それは、『日本書紀』巻一神代上の、スサノオ尊によるヤマタノオロチ退治に使われた剣について、第七段の「第三の一書」が、

其素戔鳴尊断蛇之劍、今在吉備神部許也

としているものである(31)。そしてこれに呼応するように、赤坂町の新庄川上流に「石上布都魂神社」がある。「布都魂ツツミタマ」とはこの素戔鳴尊が大蛇を切った剣のこと。現在奈良県天理市にある石上神宮について、『日本書紀』巻六の垂仁 87 年条には、このときから物部連が石上神宮を管理することになったと記し、現在では、布都御魂・布都斯御魂ツツミタマ(＝素戔鳴尊)・布留御魂フノミタマ(＝饒速日命)・宇摩志麻治命(＝饒速日の子)を祭っている。イサハヤヒやウマシマジは物部の祖である。そして、『石上神宮旧記』によれば、

素戔鳴尊の蛇を斬りたまひし十握劍、名を天羽々斬アマノハヤリと曰す。亦、蛇之龜正ヲチアラサと曰す。其の神氣を称へて布津斯魂神ツツミタマノミと曰す。天羽々斬は神代の昔より難波高津宮の御宇の五十六年に至るまで、吉備神部の許に在り今の備前国石上の地、是なり。五十六年孟冬己巳朔己酉、物部首市川臣布留連の祖、勅を奉じて、布都斯魂神社を石上振神宮高庭の地に遷し加ふ。

という。『新撰姓氏録』もほぼ同じように載せている。ここでは、布都魂を神武天皇が大和を平定する際に下されたタケミカヅチの剣とし、スサノオの剣を布都斯魂としているが、吉備にスサノオの剣があったとする点で、書紀の一書の記事に対応している。ご神体の剣がなくなった後の、現在の吉備の石上布都魂神社の祭神は素戔鳴尊となっている。石上布都魂神社がなぜ、そしていつ吉備に置かれたのかについて、相見英咲氏は、東の鎮めの熱田神宮・草薙剣に対して西の鎮めとされた、とされる(32)。明和 8(1771)年の土肥経平『備前国石上斬蛇事跡考』(33 や『岡山県通史』では、そもそも素戔鳴尊が大蛇退治をした簸川は吉備の旭川のことだとするが(34、ここでもわかに断じることはいできない。ただ本論にとって重要であるのは、石上布都魂神社は物部が奉祭していたであろうことである。書紀の一書に書かれているから、それに合わせるために神社を造ったとは考えられないから、いつのころかに建てられた吉備の石上布都魂神社には、ある時期まで布都魂ないし布都斯魂を物部氏が奉じて祭っていたと考えてよいのではないだろうか。『石上神宮旧記』によれば、それは仁徳期であるという。一方『日本書紀』第 14 の雄略 6 年 8 月条に、吉備下道臣前津屋を天皇が物部の兵士 30 人を遣わして同族 70 人ともども誅殺した、という事件を載せるが、これは大和から出兵したというよりは、吉備で石上布都魂神社を奉じていた物部が行ったと見ることはできないだろうか。石上布都魂神社は正にそのような働きを持たせられていた神社であったのではないだろうか。相見氏のいう西の鎮めである。そうであるならば、おおそ 5 世紀末ごろには、物部は吉備地方にいたということになる。直木孝次郎氏は部の設定時期を 5 世紀中葉以降ととらえられ(35、おおかたも従っており、また志田諄一氏は 5 世紀中ごろから後半にかけて勢力をもったとされる(36)。

他方、大和で石上神宮を所管することとなる物部十千根大連は、それ以前の垂仁 26 年に、

廿六年秋八月戊寅朔庚辰、天皇勅物部十千根大連曰、屢遣使者於出雲国、雖檢校其国之神宝、無分明申言者、汝親行于出雲、宜檢校定、則十千根大連校定神宝而分明奏言之、仍令掌神宝也(37)

とあって、出雲の神宝を掌管することとなっている。北の出雲、南の吉備を神宝を通して大和の抑制力となっていた物部の姿が浮かび上がってくるであろう。となれば、それらの抑えとしての物部が、地理的にも武器供給地としても最適な美作・津山地方に根拠地を構えたとしても不思議ではない。

津山は、言うまでもなく出雲街道の一つの結節点であり、吉井川を通じて瀬戸内海にはすぐである。また、赤坂町石上は、南へ新庄川をそのまま下れば金川で旭川に出ることができ、あるいは東して仁堀に出て、そこから高田川で東行すれば周匝の南の稲蒔で吉井川に合流し、仁堀から砂川沿いに南下して瀬戸内海に出ることもできる。そして、石上布都魂神社と津山は、神社からすぐ一つの峠を越えれば弓削に入り、そのまま誕生寺川・皿川で繋がっている。現代では、県道 468 号～国道 53 号のルートである。

鏡作命が鎮座したと伝承されるおよそ 200 年以上前に、物部氏は津山に入っていたと考える。そして祭祀を通じて鎮撫するため、結果として軍事的役割を果たすことになることから、武器の供給に必要な鉄を当地において支配することにもなったのであろう(38)。

4. 物部氏とオオナムヂ神

では、このとき物部氏が津山にオオナムヂ神を持ち込んだのであろうか。

上述のように、出雲の神宝を掌どるようになったのであるから、石上神宮の神宝を管理するようになって石上神宮の神を奉じるようになった、と同じ事があったとしてもおかしくはない。しかし、その場合は、あくまでも神宝の納められている出雲にある神社においてであっただろう。異地にあって、わざわざ出雲の神を持ち込むようなことはなかったであろう。

ところがここに、もうひとつ別のオオナムヂがいる。オオモノヌシである。

オオモノヌシは、『古事記』神代の巻では、大国主命が国造りの半ばで少彦名命がいなくなったので途方に暮れているところへ海上から光り輝きながらやってきて、国造りに協力し御諸山に祀られた神とし、『日本書紀』巻一神代上第七段の「第六の一書」では、大国主神はまたの名を大物主神、あるいは国作大己貴命、葦原醜男アハラシコヲ、八千戈神ヤチノカミ、大国主玉神、顕国玉神ウツクニタマノカミと言うとして、大己貴命が国造りが終わったところへ、やはり海上から光り輝きながらやってきて、大己貴神の幸魂・奇魂だと言って御諸山に鎮座した大三輪神社の神であるという。そして、崇神天皇のとき、しばしば災いが起こるので占ったところ、自分を大事に祀らないからだと大物主神が答えたので、大物主命の子である大田田根子を祭主とし、物部連の祖の伊香色雄イハコヲを神の班物者モノワツヒトとし、「伊香色雄に命じて物部の八十手が作るところの祭神の物を以て」祭ったところ、ようやくしずまったと言う(39)。ここに、物部氏とオオモノヌシ命＝オオナムヂ神との関係が見られるのである。

しかし、第七段「第六の一書」はオオナムヂ＝オオモノヌシとし、現在の諸論もこれを当然のように議論をされるのであるが、海上からやってきて云々という説話の中では、記紀ともに「御諸山に祭られた神」というだけで、その神名を具体的には言っていない。後代の人々にとって、御諸山＝三輪山の神と言えばオオモノヌシ命であるということになるではあるが、記紀の記述自体はオオモノヌシ神であるとは言っていないのである。むしろ両文をそのままに謙虚に読めば、一書で大己貴神の幸魂・奇魂だとは言うものの、いずれでも御諸山に祀れと言った神がオオナムヂ神そのものであるとは読めないのではないだろうか。『古事記』では、全く違う神であると普通ならば解せる文章ではないだろうか。つまり、オオナムヂ神とオオモノヌシ神とは、もともとは別の神であった可能性があると考えるのである。

そう考えた時、改めて注目されるのが「オオモノヌシ」という名である。意味は「偉大なるモノの主」である。とすれば、「モノノベ」は、まさに「モノの主」につかえる「モノの部民」である。畑井弘氏は、物部氏とは通念上の一氏族ではなく物部八十氏といわれる諸族の集まりであり、物部連はそれを統合した一つの族で、伊香色雄は諸物部の統合的象徴であったとされる。したがって、イサハヤヒもウマシマジもそれら諸族の一つの物部が祖としたものであるということになる(40)。しかしそうであるならば、諸族統合の象徴に、いずれか特定の族の祖をもってくるよりも、より抽象的・統合的神が創造されたとしてもおかしくはないであろう。早く森田康之助氏は、モノノベとは大物主神のモノから生じた名であると説かれる(41)。モノノベが先かオオモノヌシが先かは解らないが、両者に密接な関係があったことは間違いないのではないだろうか。5 世紀中ごろ、統合されたばかりの物部が津山にやってきたとき、その新しくも強烈な神威をもったオオモノヌシ神を奉じていたのである。

しかし、その物部氏も急速に力を失う。蘇我馬子らによる物部守屋の滅亡である。そしてその後実権を持った蘇我氏によって、吉備には白猪屯倉が置かれるのである。この白猪屯倉は、その設置場所について諸説があったが、狩野久氏は、平城宮跡出土の木簡などから、後の美作地方にも置かれたであろうとされていて、これが雄略以来の大和政権による吉備支配強化の一環として行われ、蘇我氏による国家経営戦略によるもの

であるとされる(42)。つまり、より局所的には、政権の先兵としてすでにいた物部に替わって、蘇我氏の勢力が入ってきたということである。このことで、津山の物部までもが滅ぼされるというようなことはなかったであろうが、当地への支配力という点では、大きく後退せざるをえなかったであろう。乙丸伝承で、彼が滅ぼされることなく牛馬市を行って繁栄したというのも、当地での権力の現場から遠ざけられた結果のことではなかったろうか。ただ、権力の場合から遠ざけられたとはいえ、大和政権の先兵である物部氏には、引き続き、中央国家のさまざまな要請には協力をさせられた。鹿は、前述のように古代祭祀と深く関わっていたが、一方、天照大神の天岩戸隠れの際、「真名鹿の皮」を全剥ぎにして「天羽鞆」を作って鏡を製造したと言うように、製鉄にとって欠かすことのできないフイゴを、鹿の皮で作っていた。乙丸が鹿を贅として供出していたとは、製鉄に関わったことだったのである。そして、オオモノヌシ神もその地位を譲ることとなる。とはいえ、中央にあっても国鎮めの大事な神を、無くしてしまうわけにはいかない。そこで、丁重に祝木に移し奉ったのである。かわって、朝廷支配を強化・強調する神として、朝廷の高祖・ニニギ尊が置かれたのではなかっただろうか。中国漢王朝は、支配下の郡国に廟を置いて高祖劉邦を祀らせた。かつての物部と違って、蘇我氏は新興でもあり、またこの度は自分たち氏族を前面に押し出すのではなく、朝廷・天皇の屯倉として置かれるのであるから、蘇我氏の神ではないニニギ尊は、そこに祀られる神としては、当然の神であろう。

ところが、その蘇我氏も、守屋滅亡から 70 年も経たない内に、645 年滅ぼされてしまい、物部氏は再び浮上する。こうして、一線を退きながらも製鉄に関わり続けた物部氏が持ち込んだ、物部の神であり、国鎮めの神でもあるオオモノヌシ神は、数百年を経る内にいつしかオオナムズ神と同神とされ、かつオオナムズ神が産鉄の神でもあるという属性を持つに及んで、周辺の製鉄者たちに奉じられるようになっていったのではなかっただろうか。

おわりに

今回は、中山神社に伝わる物語群をもとに考察した。しかし、『久米郡誌』は「口碑」によればとして、苫田郡田辺郷弓削建物部乙麿呂が和銅 6(713)年に自分の居住地を中山神社に寄付して加賀美庄に移り、ここを弓削庄と改称した、という伝承を載せている。また、弓削寺も肩野辺乙麿呂が天平勝宝年間に建立したという。

『作陽誌』はこれを和銅 6 年とする。弓削庄は雄略期にはあったと考えることができるから、この「口碑」にはやや混乱があり、これをそのまま受け入れることはできないとは言え、複数の伝承で 8 世紀前半に乙丸が活躍したように伝えていることは、今後考えるべき問題である。ただ、『弓削町史』は、これらのことを勘案して、乙丸を弓削部とする(43)。しかし、乙丸は肩野物部であり、弓削部ではない。乙丸が弓削庄に住んだことから言われるようになったと考えるのが自然で、もし当初より「弓削」と呼ばれていたとするならば、それは物部氏の弓削であり、それは物部弓削連守屋の後裔であったということであろう。

また、津山地方での鉄生産は 6 世紀後半からと現在は考えられるのであり、中央での物部勢力衰退・蘇我勢力伸張の時期と重なり合っていて、美作への白猪屯倉設置時期の確定という問題も含め、物部→蘇我のこの地方での影響の出方については、慎重に検討を加える必要がある。

さらに、中山神社は、『今昔物語』や『宇治拾遺物語』に「中参(中山)は猿、高野は蛇」と言われ、『中山神社由縁』は、

又御神のめしつかはせ給ふところ神たちのつかさ贅賄猿狼の神といふおはします、その眷属みな猿狐の神なり、御神はしめて長良の嵩にあらはれさせ給ふ時、猿狐の神を数多引くしてむかへつゝ永く御神につかへ奉らんとちかことし給ふ神なり、此神は猿田彦大神になんおはします

とするように、サルタヒコとも関わっている。この神は、渡来系の神とするのが一般であるが、一方、津山周辺の製鉄技術は、渡来系であるという指摘もある(44)。今回は、そうしたところまで及ばなかった。また、志呂神社、弓削庄にも触れなかった。今後の課題としたい。

注:

1. 中山神社パンフレット。
2. 中山神社編『中山神社資料』祭神 1974 年、p4。
3. 『中山神社資料』祭神 p12。この『有木家所蔵文書』では神体を石凝姥命＝鏡作命とするが、津山市史編さん委員会『津山市史』第一巻原始・古代(1972 年)p160 や谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』2山陽 四国(白水社、1991 年)p95 は、祭主有木氏の所伝は吉備武彦命説であるとする。

4. 志野敏夫「古代の吉備における加耶について—吉備・加耶交流史に関する覚書—」(加計勉 岡山理科大学紀要委員会『岡山理科大学紀要』第35号B(人文・社会科学)1999、2000年)など。
5. 『中山神社資料』祭神 p9。
6. 『中山神社資料』祭神 p9。
7. 『中山神社資料』祭神 p10。
8. 『中山神社資料』祭神 p16。
9. 吉野裕『風土記世界と鉄王神話』(三一書房、1972年)。真弓常忠『古代の鉄と神々』(学生社、1985年)など。
10. 真弓常忠 前掲書、窪田蔵郎『改訂 鉄の考古学』(雄山閣、2003年)、真鍋成史「肩野物部と鉄・鉄器生産—社寺縁起を中心に—」(同志社大学考古学シリーズVI『考古学と信仰』1994年)など。
11. 『中山神社資料』鎮座 p35、p50～p51。
12. 『中山神社資料』鎮座 p50。
13. 『中山神社資料』鎮座 p34～p35。
14. 『中山神社資料』鎮座 p38。
15. 『中山神社資料』鎮座 p43。
16. 『中山神社資料』鎮座 p46～p47。
17. 『津山市史』p160。
18. 真弓常忠 前掲書。
19. 古賀登『神話と古代文化』(雄山閣、2004年)p426～p427。
20. 『中山神社資料』撰末社 P390 に引く『一宮社伝書上』によれば、「吉野郡栗倉八社」として長尾村:四頭宮大明神、影石村:二宮大明神、猪部大明神、大茅村:入江大明神、後山村:奥津大明神、青野村:青野大明神、奥海村:奥海大明神、吉田村:山津守大明神をあげ、これについて「右八社往昔一宮之御幣を一本下し、八品に分、栗倉八社ニ勧請すといへり」と言う。
21. 前掲書 p164。
22. 『中山神社資料』撰末社 p355～p356。
23. 前掲書 p161、p163。
24. 長尾勝明著 矢吹金一郎校訂『新訂訳文 作陽誌』上巻(日本文教出版、1912年初版・1963年再版)。
25. 久米郡教育会『久米郡誌』(作陽新報真庭本社、1913年初版・1971年再版)。
26. 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5』1975年、久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(2) 榎山遺跡群Ⅱ』1980年、同『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(4) 榎山遺跡群Ⅳ』1982年。
27. 真鍋成史前掲論文 p601。
28. 真弓常忠前掲書 p28～p29。
29. 岡田精司「古代伝承の鹿—大王祭祀復元の試み—」(直木孝次郎先生古希記念会『古代史論集』上、塙書房、1988年)。
30. 谷川健一編『日本の神々—神社と聖地』第七巻山陰(白水社、2000年)p156。
31. 以下『日本書紀』の記述は、黒板勝美 国史大系編修会『新訂増補国史大系 日本書紀』前篇による。
32. 相見英咲『倭国神話の謎 天津神・国津神の来歴』(講談社、2005年)p173。
33. 渡邊頼母編『吉備文庫』第二輯(山陽新報社、1929年、山陽新聞社 1975年復刻)所収。
34. 永山卯三郎『岡山県通史』(岡山県通史刊行会、1930年初版、1962年再版)。
35. 直木孝次郎「物部連に関する二、三の考察」(『日本書紀研究』第二冊、塙書房、1966年)。
36. 志田諄一『古代氏族の性格と伝承』(雄山閣、1971年)。
37. 『日本書紀』巻六。
38. 石上神宮との関係から、物部氏が祭祀・軍事にかかわるものであることは、先人の多くも指摘するところであるが、畑井弘氏は『物部氏の伝承』(吉川弘文館、1977年)で、物部氏系の神々は鍛冶王であったとされる。ただし、美作地方での鉄生産は、現在までの考古発掘の成果によれば、6世紀後半から始まったと考えられる。
39. 『日本書紀』巻五の崇神七年条。
40. 畑井弘前掲書。
41. 森田康之助「大物主神の御神格とその問題」(神道史学会『神道史研究』第九巻六号、1961年)。
42. 狩野久「白猪屯倉と蘇我氏」(門脇禎二 狩野久 葛原克人『古代を考える 吉備』、吉川弘文館、2005年)。
43. 丸山肇『弓削町史』(岡山県久米郡弓削町役場、1954年)。

44. 亀田修一「渡来人と金属器生産」(鉄器文化研究会『鉄器文化の多角的探求』鉄器文化研究集会第10回記念大会、2004年)。
 なお、考古学的成果については、亀田教授のご教示に負うところが多かった。末尾ながら、感謝申し上げます。

Nakayama 中山 Shrine at Mimasaka 美作 and Ohonamudi god オオナムヂ・the Mononobes 物部氏

—Mainly The Tradition at Nakayama 中山 Shrine—

Toshio SHINO

Department of Socio-Information,

Faculty of Informatics,

Okayama University of Science,

1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2005; accepted November 7, 2005)

Nakayama 中山 shrine is the biggest shrine in Mimasaka 美作 area. But we can not know what is the main god of this shrine. Because they have many traditional stories. Though many story can talk us many thing especially the history about a believer around this shrine. So I try to analyze these story, and come to these conclusions : 1. Nakayama shrine was the shrine of the ironmasters at Tsuyama 津山 area in ancient time. 2. The who carried Ohonamudi オオナムヂ god which was thought as the god of the ironmasters was the Mononobes 物部氏. 3. Generally thinking, Ohonamudi was the same as Ohomononushi 大物主. But I think that they were not same god at first. Ohomononushi was a symbol of combining the Mononobes. So to be precise, the Mononobes carried Ohomononushi. 4. When the Mononobes carried this god , means when the Mononobes came to Tsuyama , may be 5th century. But the next century , they fall dawn. The story about Katanobe-chouja-Otomaru 伽多野部長者乙丸 showed that state of affairs.